一般病棟における終末期がん患者のその人らしさを支える看護に関する看護師の思考と実践

山崎　淑恵*、[1]、岡田　智子[2]
[1]聖隷クリストファー大学、[2]聖隷浜松病院

【目的】

わが国において、がん患者の約70%は一般病棟で最期を迎えており、一般病棟での終末期がん患者への看護は必要不可欠である。終末期がん患者にとって、限りある時間をその人らしく生き抜くことは、生きる希望や支えであり、それを支える看護は非常に重要だと考える。そのため、一般病棟における終末期がん患者のその人らしさを支える看護についての看護師の思考と実践を明らかにし、その人らしく生き抜くことを支える看護援助について検討する必要がある。本研究は、一般病棟において看護師が、終末期がん患者のその人らしさとはどのようなものだと捉え、それらを支えるためにどのようなことを考え、判断しているのかといった潜在的な思考や、その人らしさを支えるためにどのような看護援助をしているのかといった実践について明らかにすることを目的とした。

【方法】

研究施設の一般病棟に看護師として勤務しており、一般病棟において、終末期がん患者の看護に5年以上従事した経験のある、認定看護師と専門看護師の資格を有していない者を対象とした。研究対象者に半構造化面接を実施し、その内容を質的に分析した。本研究は、聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を受け実施した。

【結果】

研究対象者は6名で、一般病棟において終末期がん患者の看護に従事した年数は5～20年(平均8.6年)であった。平均面接時間は53.5分(範囲：40～89分)であった。

対象者は終末期がん患者のその人らしさについて、「現在と残された時間をどのように過ごしたいのかという希望」、「会いたい人に会えること」、「患者が選択・決断したことのすべて」、「患者の周りにいる大切な人や大切にしているもの・こと」、「これまでの生活や人生などライフストーリーをふまえて、患者が思うように生きられること」などと捉えていた。そして「患者の病状についての見通し」、「患者が自身のことをどこまで理解し、どう認識し、何を思っているのか」、「看護として何が必要で、一人の看護師としてどこまで介入できるのか、多職種とどのように連携できるか」などを考えていた。終末期がん患者のその人らしさを支えるために、「身体的苦痛を緩和する」、「はっきりと声に出し患者の核心的な言葉を引き出す」、「機会をうかがい家族や多職種から情報収集する」、「あきらめずにそばにいる」、「患者の解決する力を信じ無理に踏み込まない」、「看護師の考えや価値観を出さずに、とにかく患者と家族がどうしたいのかを大切にする」といった看護実践をしていることが述べられた。

【考察】

対象者の考える終末期がん患者のその人らしさは、非常に多様であるからこそ、看護師間においてその人らしさについて共通認識する必要性が示唆された。